

Japan Forum 書評の分析

——書評から見た台湾の日本研究：補論（1）——

岡崎 幸司

1. はじめに

台湾は日本の隣国にして、歴史的な背景もあることから、日本語をはじめ日本関係の教育や日本研究が盛んである。台湾における日本研究やその生産性については、川島（2003）、李（2016）、林（1994）、西川（2010）、徐（1999：2017）などで紹介されてきたが、管見の限り、川島（2003）のように日本の視点から台湾における日本研究の生産性を評価したものはあるものの、研究の国際化という観点に立って分析したものは見当たらない¹⁾。

そこで、本稿では、日本専門の国際的な学術雑誌に掲載された書評論文・書評（以下、まとめて書評等）で取り上げられた書籍と書評等の執筆者（評者）を分析した岡崎（2017a：2017b：2019）の補論として、日本専門の国際的な学術雑誌である *Japan Forum*（以下、*JF*）を対象に同様の方法で台湾における日本研究の生産性を見ることにする²⁾。サンプル期間は岡崎（2020：2021）と同じ2001年から2018年までである。なお、*JF*はサンプル期間中、2001年は年2回発行、2002年から2009年までは年3回発行、2010年以降は年4回発行と発行回数が増加している（ただし、2010年は1号・2号、そして3号・4号合併のため年2回発行）。合併号を1冊として扱うと、対象の18年間に合計60冊発行されたことになる。

2. データ

2.1. 全体像

本稿でサンプル期間とした2001年から2018年までの18年間に*JF*に掲載された書評論文（Review ArticleもしくはReview Essay）と書評（Book Review）の巻号別データを示したのが表1である。28巻（2016年）までは書評論文こそ稀にしか掲載されたなかったが、書評は掲載されるのが一般的で、多いときは10本を超える書評論文・書評が掲載されていた。しかし、編集方針が変わったのか、あるいは執筆者がいないのか、外部から事情を伺い知ることはできないが、29巻4号（2017年）以降は書評論文も書評もまったく掲載されていない³⁾。なお、書評等では1冊の書籍のみについて論評することが普通であるが、複数冊を対象としていることもあるため、表1においては書評等の本数や執筆者数と対象書籍数が必ずしも同じというわけではない。

さて、この18年の間に発行された60冊に書評論文・書評は合計335本掲載されたので、平均すると毎号約5.6本の書評等が掲載された計算になる。サンプル期間は多少異なるが、岡崎（2017a：2017b：2019）によれば、*Journal of Japanese Studies* (*JJS*)、*Monumenta Nipponica* (*MN*)、*Social Science Japan Journal* (*SSJJ*)は2001年から2015年の15年間にそれぞれ毎号平均31.7本、14.4本、18.6本の書評等を掲載しているので、編集委員会の意向なのか否かは別にして、これら3誌

と比較すると *JF* における書評等の存在はそれほど大きくない。

JF は英国日本研究協会 (British Association for Japanese Studies) の公式雑誌ではあるものの、書評等の対象となった書籍のタイトルから判断する限り、英語以外の専門書も取り上げられている。13 巻 1 号・2 号、16 巻 2 号、27 巻 2 号、28 巻 2 号ではドイツ語の書籍、15 巻 3 号ではフランス語の研究書、28 巻 4 号では日本語の学術書がそれぞれ評されていた。冊数から判断する限り例外的とはいえ、英語以外の書籍も書評等の対象にしているのは *JJS*、*MN*、*SSJJ* と同じである。*JJS* と *MN* ではドイツ語やフランス語、あるいは日本語で執筆された書籍を取り上げた書評等が見られ、さらに *SSJJ* では中国語で執筆された書籍に対する書評が掲載されていた (以上、岡崎 2017a ; 2017b ; 2019)。

表 1 *Japan Forum* 書評論文及び書評対象書籍数と執筆者数：2001 年- 2018 年

巻号 (年)	対象書籍数			執筆者数 (=掲載本数)		
	書評論文	書評	合計	書評論文	書評	合計
13 巻 1 号 (2001 年)	0	14	14	0	13	13
2 号 (2001 年) ^a	1	19	20	1	18	19
14 巻 1 号 (2002 年)	0	14	14	0	13	13
2 号 (2002 年)	0	0	0	0	0	0
3 号 (2002 年)	0	8	8	0	8	8
15 巻 1 号 (2003 年)	1	11	12	1	11	12
2 号 (2003 年)	2	14	16	1	13	14
3 号 (2003 年) ^b	2	14	16	1	9	10
16 巻 1 号 (2004 年)	0	13	13	0	10	10
2 号 (2004 年)	0	9	9	0	8	8
3 号 (2004 年)	0	0	0	0	0	0
17 巻 1 号 (2005 年)	0	8	8	0	8	8
2 号 (2005 年)	0	8	8	0	7	7
3 号 (2005 年)	0	4	4	0	4	4
18 巻 1 号 (2006 年)	0	6	6	0	6	6
2 号 (2006 年)	1	4	5	1	3	4
3 号 (2006 年)	0	5	5	0	4	4
19 巻 1 号 (2007 年)	0	6	6	0	6	6
2 号 (2007 年)	0	4	4	0	4	4
3 号 (2007 年)	0	4	4	0	4	4
20 巻 1 号 (2008 年)	0	5	5	0	5	5
2 号 (2008 年)	0	7	7	0	7	7
3 号 (2008 年)	0	10	10	0	10	10
21 巻 1 号 (2009 年)	0	7	7	0	7	7
2 号 (2009 年)	0	9	9	0	9	9
3 号 (2009 年)	0	9	9	0	9	9
22 巻 1/2 号 (2010 年)	0	11	11	0	11	11
3/4 号 (2010 年)	0	9	9	0	9	9
23 巻 1 号 (2011 年)	0	5	5	0	4	4

2号 (2011年)	0	5	5	0	4	4
3号 (2011年)	0	6	6	0	6	6
4号 (2011年)	0	5	5	0	5	5
24巻1号 (2012年)	0	5	5	0	5	5
2号 (2012年)	0	6	6	0	6	6
3号 (2012年)	0	6	6	0	6	6
4号 (2012年)	0	5	5	0	5	5
25巻1号 (2013年)	0	4	4	0	4	4
2号 (2013年)	0	5	5	0	5	5
3号 (2013年)	0	3	3	0	3	3
4号 (2013年)	0	0	0	0	0	0
26巻1号 (2014年)	0	0	0	0	0	0
2号 (2014年)	0	4	4	0	4	4
3号 (2014年)	0	4	4	0	4	4
4号 (2014年)	0	5	5	0	5	5
27巻1号 (2015年) ^c	5	4	9	1	4	5
2号 (2015年)	0	7	7	0	7	7
3号 (2015年) ^c	1	6	7	1	6	7
4号 (2015年) ^d	0	5	5	0	5	5
28巻1号 (2016年)	0	4	4	0	4	4
2号 (2016年)	0	3	3	0	3	3
3号 (2016年) ^e	0	0	0	0	0	0
4号 (2016年)	0	5	5	0	5	5
29巻1号 (2017年)	0	7	7	0	6	6
2号 (2017年)	0	0	0	0	0	0
3号 (2017年)	0	6	6	0	6	6
4号 (2017年)	0	0	0	0	0	0
30巻1号 (2018年)	0	0	0	0	0	0
2号 (2018年)	0	0	0	0	0	0
3号 (2018年)	0	0	0	0	0	0
4号 (2018年)	0	0	0	0	0	0
合計	13	347	360	7	328	335

- (注) 1. 執筆者数・評者数は延べ人数である。同一巻号に同じ評者による書評が複数本掲載されていることがあり、この場合は別個のものと見なしたが、同一書評で複数の書籍を取り上げている場合は1名の評者による1本の書評として扱った。
2. ^a 13巻2号の書評でCD-ROM of Encyclopedia of Japanが取り上げられているが、本表では対象外とした。
3. ^b 15巻3号では、5巻セット・2巻セットを取り上げている書評が掲載されているが、本表では個別に数え、それぞれ計5冊・計2冊とした。
4. ^c 27巻1号および27巻3号はReview Essayを書評論文と見なした。
5. ^d 27巻4号のReview Articleは通常とは異なり、冒頭に評価対象の書籍が掲載されていないため、本表から除いた。
6. ^e 28巻3号のReview Essayは膨大な書籍リストを掲載しているのみで、個別書籍に対して書評は行われていないことから、本表には含めていない。

(出所) *Japan Forum* プリント版より筆者作成

2.2. 出版地

表1が示すようにサンプル期間である18年間に書評論文あるいは書評が取り上げた書籍は360冊に上る。その出版地を国別に整理したものが表2である。

*JF*は英国日本研究協会の公式雑誌であるが、書評等で取り上げられた書籍の発行地としては米国が最多で181冊、全360冊中50%のシェアを占めている。*JJS*および*MN*においても米国がシェア60%台で出版国1位の座を得ていた(岡崎2017a; 2017b) ことと比較すると10%程度低いものの、日本関連研究書の発行における米国の影響力の大きさを物語る数字である⁴⁾。

出版地2位は英国であり、シェアは40.9%に達する。*JJS*、*MN*、そして*JF*では米英が1位・2位となり、両国合わせて75%から90%強のシェアを有する。日本の書籍を積極的に紹介することを役割の1つにしている*SSJJ*でも米英を合計するとそのシェアは約51%であり、米英両国の存在感は大きい(以上、岡崎2017a; 2017b; 2019)。

米英以外の国で発行された書籍で書評等の対象とされたのは各国とも10冊未満である。*JF*が欧州で編集発行されているという事情によるのであろうか、オランダ(3位、8冊)とドイツ(4位、6冊)で出版された書籍の数が日本で刊行された書籍数(5位、5.33冊)を上回っている。

*SSJJ*の書評等でこそ日本で出版された書籍が積極的に取り上げられるが、*JJS*や*MN*同様、*JF*でも日本を含めアジアの出版社によって発行される日本研究書が書評等の対象とされることは非常に稀である。日本を除くと、英語圏に属するシンガポールとインドが発行地とされた書籍が観察されるだけであり、サンプル期間においては、何語で執筆されたかを問わず、中国や台湾、韓国等で出版された書籍が書評等の対象とされたことはない。

表2 書評論文・書評対象書籍の出版地：2001年-2018年

順位	出版地	書籍数	順位	出版地	書籍数
1	米国	180.92	7	デンマーク	1
2	英国	147.41	7	イタリア	1
3	オランダ	8	7	シンガポール	1
4	ドイツ	6	7	スウェーデン	1
5	日本	5.33	12	インド	0.33
6	豪州	5		不記載	2
7	カナダ	1		合計	360

(注) 1. Book Review、Review Article、Review Essay で取り上げられた書籍を対象とした。

2. 出版地は書評論文・書評に記載された内容による。出版地が複数掲載されている場合はその数で除した。また、出版地が掲載されていない大学出版会発行の書籍についてはその大学の本校所在地を出版国とした。

3. その他注記事項については表1を参照。

(出所) *Japan Forum* プリント版、大学出版会をはじめとする関連ウェブサイトより筆者作成

2.3. 出版社

サンプル期間中に書評等で取り上げられた360冊の書籍を発行した出版社の上位14社とアジアの出版社を示したのが表3である。英国で編集される英文学術雑誌という性格によるものであ

ろう、出版社としては欧米、とりわけ英米の出版社が大部分である。サンプル期間は異なるが、Curzon (Routledge, RoutledgeCurzon)、University of Hawai'i Press、University of California Press は *JJS*、*MN*、*SSJJ* 3 誌の書評等で取り上げられた書籍の出版数上位 5 機関にもランクインしている (岡崎 2017a ; 2017b ; 2019、ただし University of Hawai'i Press は *SSJJ* では 12 位以下)。これらは、日本研究について強い関心を有し、またある程度以上注目される日本関係の専門書を多数発行している出版社と形容してよいであろう。

表 3 *Japan Forum* 書評等対象書籍の出版社別書籍数：2001 年- 2018 年

順位	出版社	書籍数
1	Curzon (Routledge, RoutledgeCurzon)	85.5
2	University of Hawai'i Press	45
3	University of California Press	30
4	Macmillan (Palgrave, Palgrave Macmillan)	23
5	Cornell University Press *	16
6	Columbia University Press	15
7	Cambridge University Press	12
8	Duke University Press	11
9	Brill	7
10	Global Oriental	5
	Oxford University Press	
	Princeton University Press	
	Stanford University Press	
	State University of New York Press	
15	Blackwell (Wiley-Blackwell) など 7 社	4
22	Harvard University Asia Center など 3 社	3
25	Ashgate など 3 社	2
28	Edition Synapse など 2 社	1.5
30	Hituzi Shobo (ひつじ書房)	1
	Horitsubunkasha (法律文化社)	
	Kodansha (講談社)	
	Kodansha International (講談社インターナショナル、2011 年解散)	
	NUS Press (シンガポール国立大学出版局)	
	University of Tokyo Press (東京大学出版会)	
	その他 37 社	
73	Nissan Institute	0.5
	出版社不記載	1
	合計 (73 出版社 + 不明 1 社)	360

- (注) 1. 複数の出版社で発行している場合はその数で除した。
 2. *この他 ILR Press, an imprint of Cornell University Press 出版の書籍 1 冊が取り上げられた。
 3. その他の注記事項については表 1 ならびに表 2 を参考。
 (出所) *Japan Forum* プリント版、各出版社ウェブサイトより筆者作成

出版社の中で書評の対象とされた書籍を最も多く発行したのが Curzon (Routledge, Routledge-Curzon) であり、その数は 85.5 冊に達する。University of Hawai'i Press、University of California Press がおのおの 45 冊、30 冊で続いているが、Curzon (Routledge, RoutledgeCurzon) の半分から 3 分の 1 強にとどまっている。Curzon (Routledge, RoutledgeCurzon) は *JJS* と *SSJJ* でも 1 位、*MN* では 3 位であった。

アジアに目を向けると、中国・台湾・韓国などアジア諸国においても日本語や英語、現地の言語によって書かれた日本関係専門書は出版されているものの、この 18 年の間に *JF* で評された書籍を発行したアジアの出版社は日本と英語圏に属するシンガポール・インドの出版社だけであり、中国・台湾・韓国をはじめ他のアジア諸国の出版社は観察されない。日本に関係する資料は日本語で記され、日本が所蔵しているのが一般的である。また、日本で生まれ育った研究者は幼い時から日本語を学習し、日本の文化や思考方法を身に付けている。このような「土着スカラシップの重み」(中山 1974, 289) を考慮すれば、日本語で執筆され日本で出版された書籍が英文とはいえ日本専門学術雑誌で書評論文や書評の対象になるのは当然であろう。中国や台湾、韓国で出版された日本関係書が書評や書評論文で対象にされなかった理由の 1 つとしては、中国語や朝鮮語(韓国語)で執筆された書籍の内容を理解できる評者、あるいは執筆を希望する研究者がいない可能性を指摘することができる⁵⁾。

2.4. 書評等執筆者の所属国

表 4 で書評論文の執筆者ならびに書評の評者を所属国別に整理した。

表 4 書評論文・書評執筆者の所属国：2001 年-2018 年

順位	所属国	執筆者数	順位	所属国	執筆者数	順位	所属国	執筆者数
1	英国	204.5	6	カナダ	4.5	11	中国	1
2	米国	49	7	デンマーク	3	11	フランス	1
3	日本	44	7	ノルウェー	3	11	タイ	1
4	ドイツ	10	7	スウェーデン	3		不明	3
5	豪州	6	10	スイス	2		合計	335

(注) 1. 執筆者数は延べ人数である。執筆者の所属国が複数ある場合は、それぞれその数で除した。

2. 1 本の書評論文あるいは書評で何冊の書籍を取り上げていても執筆者は 1 名として扱った。

3. その他の注記事項は表 1 を参照。

(出所) *Japan Forum* のプリント版、各大学等のウェブサイトより筆者作成

JF では書評等の執筆者はほぼ全員が欧州、北米、日本、そして豪州から選出されている。英国日本研究協会の機関誌だからであろう、英国居住の研究者が 204.5 名と最も多く、全体の 61% を占めている。事務局が設置されている英国が国内に日本関係専門書の書評が可能な研究者を多数擁していることの表れである。1 位の英国と 2 位米国の 49 名と合わせると 75.7%、全執筆者の 4 分の 3 に至り、日本を含めた英米日では 88.8% にまで達している。*JJS*、*MN*、*SSJJ* 3 誌では、書評等執筆者に占める日米英 3 カ国所属研究者の比率は、最も低い *MN* で 78%、*JJS* が 84%、*SSJJ* が

88%である（岡崎 2017a；2017b；2019）。*JF* は 89%であり、若干とはいえ、これら 3 誌を上回る比率を示している。日本関係研究書に関する書評等は 4 誌とも日米英 3 カ国所属研究者の寡占状態にある。

JF で書評等執筆者を輩出しているのは、欧米と英語圏に属する豪州・カナダ、そして日本を除くと、中国とタイの 2 カ国だけである。*JJS* では中国香港・イスラエル・ロシア・シンガポール・韓国の研究者の手による書評等が掲載されていたこと、*MN* においてはエストニア・中国香港・イスラエル・ロシア・韓国・トルコ・アラブ首長国連邦の学者による書評等が見られたこと、*SSJJ* では中国・中国香港・イスラエル・メキシコ・韓国・シンガポール・タイ・台湾の書評等執筆者がいたことと大きく異なる点である。

JF の書評等執筆者の所属国は他の 3 誌より少ない。とりわけ日本以外のアジアにおいては、中国とタイの 2 カ国に限られている。*JF* の諮問委員会を含め編集委員会では、日本を除くアジア諸国においては日本専門書の英文書評を担当可能な研究者が少ない、との認識を有しているのかもしれないし、アジア諸国の日本研究者は *JF* の編集委員や諮問委員のネットワークではそれほど知られていないのかもしれない⁶⁾。

2.5. 執筆者の所属機関

表 5 は、書評論文あるいは書評を執筆した研究者が書評等執筆時もしくは書評等掲載時に所属していた機関と延べ人数による執筆者数を示したものである。サンプル期間の 18 年間に 129 機関の研究者が書評論文あるいは書評を執筆しており、表 5 は、英国の日本研究者を中心とした 1 つの国際学術ネットワークとして見ることができる。

個別機関で見ると、延べ執筆者数上位 11 大学は英国 10、日本 1、と英国の大学が上位を占めている。執筆者数の上位 11 大学（10 位が 2 大学）が米国 10、英国 1 と米英、とりわけ米国に偏っていた *JJS*、同じく上位 14 大学（10 位が 5 大学）が日本 12、米国 2 と日米の寡占であった *SSJJ* と同じ傾向である。日本以外のアジアでは中国の Beijing Normal University（北京師範大学）、タイの Chulalongkorn University（チュラロンコン大学）の研究者が書評の評者に名を連ねている。

表 5 書評論文・書評執筆者の所属機関：2001 年-2018 年

順位	機関名	立地国	延べ執筆者数
1	University of Sheffield	英国	34
2	University of Leeds	英国	33.5
	University of Oxford	英国	
4	School of Oriental and African Studies, University of London	英国	17
5	University of Nottingham	英国	12
6	London School of Economics and Political Science, University of London	英国	11
7	Hokkaido University（北海道大学）	日本	7
	University of Kent	英国	
9	University of Cambridge	英国	6
	University of Edinburgh	英国	

Japan Forum 書評の分析

	University of Manchester	英国	
12	Cardiff University	英国	5
13	University of Birmingham	英国	4
14	Shiga University (滋賀大学)	日本	3
	University of Tokyo (東京大学)	日本	
	Waseda University (早稲田大学)	日本	
	その他 3 大学	米英など	
20	Japan Women's University (日本女子大学)	日本	2
	Kansai Gaidai University (関西外国語大学)	日本	
	Kyushu University (九州大学)	日本	
	Musashino Women's University (武蔵野女子大学、現・武蔵野大学)	日本	
	Shumei University (秀明大学)	日本	
	その他 15 大学	米英など	
40	Ritsumeikan University (立命館大学)	日本	1.5
	その他 2 大学	英国・カナダ	
43	Akita International University (国際教養大学)	日本	1
	Beijing Normal University (北京師範大学)	中国	
	Chulalongkorn University	タイ	
	Daito Bunka University (大東文化大学)	日本	
	Doshisha Women's College of Liberal Arts (同志社女子大学)	日本	
	German Institute for Japanese Studies (DIJ) Tokyo (ドイツ日本研究所)	日本	
	International University of Japan (国際大学)	日本	
	JP Morgan, Tokyo	日本	
	Kobe Gakuin University (神戸学院大学)	日本	
	Konan University (甲南大学)	日本	
	Meiji Gakuin University (明治学院大学)	日本	
	Nagoya University (名古屋大学)	日本	
	Niigata University of International and Information Studies (新潟国際情報大学)	日本	
	Osaka City University (大阪市立大学、現・大阪公立大学)	日本	
	Saitama University (埼玉大学)	日本	
	Sophia University (上智大学)	日本	
	Teikyo University (帝京大学)	日本	
	Tokyo Jogakkan University (東京女学館大学)	日本	
	その他 65 機関	米英など	
127	Tama University (多摩大学)	日本	0.5
	その他 2 機関	英国	
	所属国のみ判明	英国	2
	所属不記載	不明	3
	合計 (129 機関)		335

(注) 1. 10 位未満はアジア関係のみ掲載した。

2. その他の注記事項は表 4 を参照。

(出所) *Japan Forum* のプリント版、大学など関連ウェブサイトより筆者作成

3. 終わりに

本稿では、2001年から2018年までの18年間を対象期間として英国日本研究協会の公式雑誌にして ESCI (Emerging Sources Citation Index) に収録されている日本専門学術雑誌 *Japan Forum* の書評論文・書評で取り上げられた書籍 (CD-ROM of Encyclopedia of Japan を除く) 360冊の出版地ならびに出版社、そして延べ執筆者 335名が所属する国 (地域) と機関について調査した。

分析の結果、書評論文・書評の対象となった書籍のうち、米国で発行されたものが最も多く 180.92冊、率にすると全体の 50.3%であった。2位は英国の 147.41冊 (40.9%)、3位はオランダの 8冊 (2.3%)、4位はドイツの 6冊 (1.7%) であり、米英の上位 2カ国で 91.2%、米英蘭独の上位 4カ国で 95.1%、100%近くを占めていた。日本は 5位とはいえ 5.33冊 (1.5%)、日本以外のアジアではシンガポールで発行された書籍 1冊 (0.3%)、インドで出版された書籍 0.33冊 (0.1%) が書評等の対象として取り上げられただけである。中国大陸や香港、台湾、韓国でも日本関係の研究書は出版されているが、本稿がサンプルとした期間においては JF の書評等で取り上げられることはなかった。その一因としては英語と日本語以外のアジア言語で著された書籍は評者を探すことが難しいことが考えられる。

書評・書評論文執筆者の延べ人数では、英国が 204.5名で 61.0%を占め、2位米国の 49名 (14.6%) の 4倍強となっている。3位は日本の 44名 (13.1%) で、英米日の 3カ国を合計すると 297.5名、書評等執筆者延べ人数のほぼ 9割に達する。多少の差はあるものの、JF も JJS、MN、SSJJ と同様に書評論文・書評は米英日の研究者に強く依存している。中国・タイの研究者がそれぞれ 1名 (各 0.3%) が書評の評者を務めた以外、他のアジア諸国 (地域) の書評論文・書評執筆者は見られない。JF の書評論文・書評執筆者が所属している機関に台湾の大学や研究所等が見られないことは、台湾の日本研究者が少なくとも英国を中心にしたときの国際的な日本研究者のネットワークで相対的に認識されていないことを暗示するものであろう。

2001年から2018年をサンプル期間にして JF を調査した結果、台湾で発行された日本関係の書籍は書評等の対象にされることもなく、台湾で研究を続ける日本専門家が書評論文の執筆者を務めたり、書評を担当することも観察されなかった。この意味では、国際的に見て台湾の日本研究は生産性が高いとは言えず、換言すれば台湾の日本研究の国際化は大きくは進展していないと考えることができる。もっとも、視点を変えれば、台湾の研究者が国際的な日本研究に貢献できる余地は大きいとの見方も可能であろう。

次稿では、JF と同じく豪州日本研究学会の学会誌にして ESCI に収録されている日本専門の国際学術雑誌 *Japanese Studies* の書評論文・書評を取り上げる。

付記

本稿の掲載を許可して下さった『立命館文學』編集委員会ならびにご紹介の労を賜った北村稔教授に謹んで御礼申し上げます。本稿は研究の国際化という視点から台湾における日本研究やその生産性をテーマにした 2014年から続く研究の一環であるため、過去の拙稿と重複したり類似した文章や表現があるかもしれない。ご理解とご寛恕をお願いする次第である。なお、ありうべき誤りに対しては筆者一人がその責任を負うものである。

注

- 1) 岡崎 (2014; 2020) では日本専門の国際学術雑誌の編集委員・諮問委員、岡崎 (2016; 2021) ではそれらに掲載された論文を対象に台湾における日本研究の生産性を論じた。
- 2) *Japan Forum* は ESCI (Emerging Sources Citation Index) や Scopus などに収録されている。
- 3) 29 巻 (2018 年) にはまったく掲載されなかった書評であるが、30 巻 1 号 (2019 年) では掲載されている。
- 4) *SSJJ* においては日本が出版地 1 位である (岡崎 2019)。
- 5) 中国などで出版された日本関係の専門書は欧米の研究者には入手が容易ではない、という事情があるのかもしれない。
- 6) タイの書評執筆者 (28 巻 2 号) は Birkbeck College, University of London の博士課程学生でもあり (Turner 2016)、英国との接点が見られるが、中国の書評執筆者 (14 巻 3 号) と英国との関係については筆者が調査した限りでは不明である。

参考文献

- 川島 真 (2003) 『台湾における日本研究』財団法人交流協会
- 李 世暉 (2016) 「台湾における日本研究の現状と展望—社会科学領域に関する一考察—」『問題と研究』国立政治大学国際関係研究センター、第 45 巻 1 号、pp.39-66.
- 林 文月 (1994) 「台湾の日本研究—日本文学研究を中心として」『日本研究』国際日本文化研究センター、第 10 巻、pp.31-8. <http://doi.org/10.15055/00000842> (2022 年 3 月 1 日取得)
- 中山 茂 (1974) 『歴史としての学問』中央公論社
- 西川 潤 (2010) 『台湾における日本研究—制度化の現状、課題と展望—』早稲田大学台湾研究所
- 岡崎幸司 (2014) 「台湾における日本研究—国際学術ネットワークと台湾の日本研究者—」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 640 号、pp.15-25.
- _____ (2016) 「研究の国際化と台湾の日本研究—日本専門国際学術雑誌掲載論文の分析—」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 647 号、pp.35-43.
- _____ (2017a) 「*Journal of Japanese Studies* 書評の分析—書評から見た台湾の日本研究 (1)」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 651 号、pp.89-98.
- _____ (2017b) 「*Monumenta Nipponica* 書評の分析—書評から見た台湾の日本研究 (2)」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 654 号、pp.77-86.
- _____ (2019) 「*Social Science Japan Journal* 書評の分析—書評から見た台湾の日本研究 (3・完)」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 662 号、pp.86-96.
- _____ (2020) 「国際学術ネットワークと台湾の日本研究者：補論—ESCI 日本専門 2 誌の分析—」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 669 号、pp.89-97.
- _____ (2021) 「研究の国際化と台湾の日本研究：補論—ESCI 日本専門 2 誌掲載論文の分析—」『立命館文学』立命館大学人文学会、第 676 号、pp.1-7.
- 徐 興慶 (1999) 「現代の台湾における日本研究」『天理大学学報』天理大学学術研究社、第 190 輯、pp.129-50.
- _____ (2017) 「世界に開かれた台湾の日本研究」『日本研究』国際日本文化研究センター、第 55 巻、pp.117-30. <http://doi.org/10.15055/00006580> (2022 年 3 月 1 日取得)
- Turner, Simon (2016) Making friends the Japanese Way: Exploring *yaoi* manga fans' online practices, *Mutual Images* 1: 47-70. <https://mutualimages.org> (2022 年 3 月 18 日取得)

(台湾中華大学人文社会学院副教授)